



●舟山さんのすいか畑は1.2ヘクタール。ハウスと露地の両方で生産を行っています。「ハウスの方が天候の影響を受けにくいのでハウスでの栽培が増えています」。味はどちらの栽培でも変わらないそうです。



●1991年から採用し、大反響を得たパッケージは農協職員が考案したもの。キャラクター「でんすけくん」の名刺台紙は町のオリジナル。当麻町在住もしくは当麻町勤務の方なら誰でも使用できます。



●稲作を助ける「田助」がでんすけすいかの名前の由来。舟山さんも稲作を行っています。「育苗時期は重なりますが、すいかの育苗は農協が行うので稲作との両立ができる。生産者と農協の間に確かな信頼関係があり、協力し合えることが当麻の強さです」と舟山さん。



北海道農業に限りない愛情を注ぎ、  
たゆまぬ努力を続ける人々がいます。  
農業の未来を創造する「北の農業人」の  
情熱や取り組みをご紹介します。

●ブランドの継承者として飛躍に挑む

**品種改良も地域での活動も、  
すべては産地を未来に残すため。  
2代目として自分たちの足元を見直し、  
強い農業の基盤を創りたい。**

〔当麻町〕

舟山賢治さん



●でんすけ部会では繁忙期も必ず月に1回は勉強会を行い、規格検討会も月に数回行っています。「他産地からの視察を受け入れることも視察に行くこともあります。でんすけすいか生産者の意識はとにかく高いと感じます」



●最初はしま模様のある皮が黒くなってきたら収穫時期。湯ではなく着果棒を見て収穫時期を判断しています。わらは日焼け防止のためのものです。

**苦労もやりがいに  
農作業はすべて楽しい**

北海道のほぼ真ん中、上川盆地の中央部に位置する当麻町。この町の代名詞として知られるのが、夏の高級ギフトとして名高い「でんすけすいか」です。今年で誕生から30周年を迎えたでんすけすいかは生産者の代替わりも進み、今は2代目が活躍しています。当麻町そ菜研究会でんすけ部会長を務める舟山賢治さんは、そうした若手生産者のリーダー格です。「今年は初セリで高値をつけていただき、メディアにも多く取り上げていただきました。注目していただけてとてもうれし」と舟山さん。お父様の代からつくり始めたでんすけすいかを受け継ぎ、

日々生産に汗を流していますが、意外にも20歳で家業を継ぐまで、家の手伝いをしたことはほとんどなかったそうです。「でも、農作業を強制されなかったことがかえって良かったのかな。自然に農家になろうと思ったし、草刈りをしていても楽しい。農家は私の天職です」

取材にお伺いした7月初旬はちょうど出荷の最盛期。作業の合間、さわやかな汗を流しながら終始にこやかに話くださった舟山さんですが、生産には苦労もつきものです。でんすけすいかの品種である「タヒチ」は味が良い一方、寒さや雨に弱く、育てるのが難しい品種。出荷時の運搬作業など、生産には体力も必要です。さらにでんすけすいかは非常に厳しい出荷基準が設けられ、総合判定ではな

**大きな変換期だからこそ  
攻めの姿勢でさらなる進化を**

積み重ねられた努力が確かな品質とブランド価値につながっているでんすけすいかですが、現在の生産農家は39戸。ピーク時の67戸から減少している一因

など、多様な人材をチームに組み入れていることです。「生産者以外の意見を聞くことでより幅広い視点で当麻農業の『生き方』を考えていきたい。2代目に生産の中心が移ってきている今は大きな変換期。ここで自分たちを見直すことで、足腰のしっかりした産地を確立したいと思っています」

**明日のための環境づくり  
視点を変えて可能性を拓く**

でんすけすいかの作付面積は当麻町全体で15ヘクタールほど。出荷される玉数は年間約7万玉と、決して多くはありません。そこで収益の高い販路として、アジアや中東など海外への輸出も視野に入れています。「昨年の夏から台湾への試験輸出を始めました。世界には甘くないすいかを食べている地域もある。そういう地域ではでんすけすいかはすいかの概念を変える存在になります。海外との価格競争など北海道農業は厳しい状況に置かれていますが、視点や考え方を変えればまだまだ挑戦できる余地はあると信じています」

内省を出発点に産地の基盤固めに取り組みむかたわら、外に目を向け広く知識を取り入れることも忘れません。2013年に発足した当麻農協未来創造チームの活動はそのひとつ。農業のあるべき未来像を町や農協に提言することを最終目標として、3年計画で先進的な産地の視察などを行っており、舟山さんもメンバーとして参加しています。特徴的なのは商工業などの異業種や主婦

でんすけすいかを未来に引き継ぎたいという強い思いで、日々の生産活動と未来につながる生産環境づくりに励む舟山さん。若い生産者が多いことが大きな希望と話す中でこぼれた「私の2人の子どもたちも将来は農家になりたいと言ってくれているんです」という言葉と笑顔に、日本有数のブランドの輝く明日を感じることができました。